

高退協ニュース

高退協事務局

1987.5.

No. 33

あいさつ
御挨拶
一九八七年度定期総会
新入生をよろしく
退職にあたって
統一地方選挙を闘って

役員
会長 渋谷 敏
事務局長 徳田 充治
事務局 竹村 義典
小路 勝三郎
富永 三雄

あいさつ

会長 渋谷 敏

薫風爽やかな初夏の季節となりました。皆さんお元気で過ごしたことと存じます。また本年退職された先生方、長い間本当にご苦労さんでした。今日まで教育の理想実現と組織の発展に頑張りぬかれたいみなさんに心より敬意を表します。

いま中曽根自民党政府が強行しよとする戦後政治の総決算のもとで軍事費GNP一割突破、国家機密法、臨教審答申の具体化など重大な局面を迎え、半面で軍拡のための福祉、教育は切り捨てられ、私達の生活は深刻になるばかりです。

今年には憲法、教育基本法が施行制定されて四十年になります。憲法は年を経るごとに空洞化され、特に軍備はますます世界第七位の戦力を保持するまでになっています。私達は歴史を繰返さないために、各民主諸団体と連帯して、憲法を擁護し、反戦平和、民主教育を守り、生活防衛のために奮闘しなければなりません。皆さんの健康を祈念すると共に、一層のご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

御挨拶

高教組執行委員長 徳田 充治

さわやかな季節をむかえました。高退協のみならずには益々御精勝のことと存じます。

今年には日本国憲法施行四十年目、教育基本法制定四十年目にありますが、最近の政治・経済・教育の動きを見ると、中曽根政権は、憲法を形骸化し、教育基本法を無視し、ひたすら軍国主義化の道をたどろうとしていると断言せざるをえません。五月二日におこなわれた高知県教組四十周年記念行事に私も参加致しましたが、戦後の民主教育の歩みをふり返り、勤評反対・安保反対の闘争で、体を張って、多くの犠牲を払いながらも、「教え子を再び戦場に送るな」の一点で団結して闘ったきびしい時代を思い起し、その教訓をいつまでも大切にし、今日に生かさないければと、感慨ひとしおでした。

新入生をよろしく

竹村 義典

先輩から「早く高退協に入りやサンデー毎日は楽しいぜよ」と言われましたが、確かに教育の困難が言われたらしてからは、しんどいなあと思つた事もありました。然し吾が子は育つたが次は孫が入学するようになる。停年制もできず思つてやうてきた次第ですが、四月一日となるのも行く所がない。退職とはこんなものか。何だか時差ボケのような日々が過ぎました。段々に自分なりの日課を過すようになりまし。けれど、職業「無」と書く時の気楽さと一抹の淋しさの交錯、それに経済の問題もあり、心の整理はまだ不十分です。

組合活動は暫く遠のいておりました関係で、勝手にわからぬ状態であつたのですが、総会では諸先輩にお目にかかれ、大変なつかしく、勇気づけられました。どうか新入生をよろしくご指導下さい。

退職にあたって

小路 勝三郎

高教組四十年の古老から、高退協の新米への急転換にまどいを感じており、今後ともよろしくご指導とご厚情を頂きたくお願い致します。

今年には戦後四十年、戦争を知らない人間が多数を占めるようになり、戦争の風化が進み軍国主義的風潮が強まりつゝあるなかで、戦争の悲劇やその罪悪、核戦争の恐怖を語り伝える「語り部」活動の重要性があらためて強調されていきます。

教育界でも戦後四十年、會つて民主教育の確立、職場の民主化、教育の中立性擁護のために、勤評闘争をはじめ数多くの権力の攻撃に正面から対決して闘つた時代を知らない教員が多数を占めるようになって、民主教育の風化が現れはじめる。労働者の権利がこたわれつつあり、管理職や部長・主任の発言が職場を支配しはじめつつあり、生徒の学習権を簡単に奪い取る傾向が強まりつつあるなど、教育現場が非民主的なものに変質しつつあるように思われるなかで、権力の強大さ、その攻撃の巧妙さ、

執りよさを過去の闘いの事実にもとづいて語り伝え、民主的現場の再構築を訴える「語り部」活動ではないかと痛感します。そしてこの「語り部」の仕事成し得る者は高退協員を以て外にいないのではと思われま。

私は一日も早く健康を快復し、この仕事に尽力ながら尽くしていきたいと念願するものです。

統一地方選挙を闘って

ともかく疲れました。三ヶ月間電話で政治を語りかけました。なぜこんなことを？ 敗戦の年、一九四五年まで八年間、一兵卒として戦争の悲惨さをなめつくした者の、「主権在民、民主主義、基本的人権、戦争絶対否定」を守り抜く使命感とも言うべきものでしょうか。私自身の価値観の問題でもあります。あらゆる手段を通じて自分の政治理念を正しく仲間や皆さんに伝え、一人でも多く、同じ政治選択を示す仲間を創造するのです。ささいな闘いでもありました。私自身の政治的信念でもありま

選挙は国の主人公である国民がその意志を一票の行使で正しく示す唯一の機会です。三百名を越す議席を背景に「売上税、マル優廃止、法人税減額、軍事費の拡大、老人福祉の推進、教育費の減額」などを強引に国民に背負わそうとする政党とは対決するのみです。でなければ、新しく大転換した戦後の民主日本は守れません。国家権力を握る保守反動と正々堂々と野党を対決できる真の意味で闘って大きいものです。

統一地方選挙では、私たちは一歩前進しました。しかし闘いはまだこれからです。政治決戦では当落のいづれかがあるのみです。あの山原選挙の南の熱い炎をたやなことなく、反動勢力と闘うことは国民のすべてが待たねばならない崇高な最高の倫理だとの確信を深めました。貴重な体験でした。皆さん、どうもありがとうございました。会員諸兄のご健勝を祈ります。

八七年立夏の日に、富永記